

だけで、今はないといふ。畑に芋を掘つて居た百姓は、川向から来たとの話に、それでは歸りに舟に乗せて渡してくれと頼むて置たが、寫生をしてゐる間に、斷りなしに去つてしまつた、詮方なしに橋を渡る可く沼津の町まで戻る。

橋から牛臥迄は可なり長かつた、何處が宿屋かとたずねく三島館に着いて、疲れた足を伸した。

部屋は六疊に三疊、離れて居るので諍かてよい、椽側の下は直ぐ海で、靜浦あたりであらう、燈火がちら／＼見える、澄みわたつた月も出て、景色を一層美はしくさせた、浪の音はザブリ／＼と、時々思ひ出したやうによせて来る。(十一月十三日)

ほの／＼と明けてゆく朝の景色はよかつた。圓い小山の頂のみが美しく見えたのが、霧の晴れると共に姿は明らかになり、島かげからはおり／＼白い帆が産れる。風なき時には山の影を其まゝ映して、景色を二つにする、風ふく時には影は亂れて、やがては一面に網を張つたやうに、細かい漣が立つ、いつまで見てゐても飽くことを知らない。

宿から二三丁、松原の中で、愛鷹を前にした富士を寫し、更に我入道の濱へ出て、漁船を畫いた。狩踊の岸を堤を傳ひて、右に左に、鉛筆スケッチを得ること數枚、やがて昨日の道を、三時半の上り列車に間に合ふやうにと沼津停車場さして歩を進めた。(十一月十四日)

巴里の水彩畫展覽會

石井 柏亭

グレに居た時懇意にした米人丑氏に案内狀を貰つたので、予は今月十日ヂオーヂ。プチーの二階で開かれたソシエテ。アンテルナシヨナル。ダクアレリスト(内外水彩畫會)の展覽會のヴェルニサーヂュに臨んだ。さうして予は其時會員の一人なるヂュメニール氏に紹介され、またこれは何も出して居ないスレイド氏に話しかけられた。此展覽會は今度のが七回目ださうであるが、其陳列品の最初の感じは甚面白くなかつた。併しながら招待された人々と畫家との應對の混雜に妨げられてよく見えなかつた處もあるか知らぬと今日再び觀に行つたが、大體に於て最初の印象の誤つて居ないことを確めた。

其處には随分甘つたるい畫の多くがある。着眼の陳腐に加ふるに型にはまつた手法を以てしたものが少くない。單なる名處畫に留まるものあれば綠翠したる池水に白鳥を點じて素人の垂涎を促すもある。水彩畫の強味と云ふことを曲解して、みだりに暴れた筆を用ふるもあり、華麗な赤紫の傳彩の三版に類するもある。また可なり的大幅に水邊の牧牛を描いた一枚の如きは如何して塗つたかを疑はしむる程で其空が「ムラ」なしに奇麗に塗られて居る、けれどもたゞそれ丈のことでは何等の興趣もない。スレイド氏も賣る爲めの展覽會のやうに思はれると云つて居たが、春のサロンにもこれと云ふ水彩畫を見なかつた、予は尙他に代表的の水畫の展覽のあるか否かを知らない。

ヂユメニール氏はヴェニスサン マルクの堂内を五枚ばかり出して居る。俗畫と云ふでもあるまいが、たゞ根氣よく堂内の暗い處を寫生したまて、深い感じは出て居ない。光りを出す時、白を用ふることをせずに、一旦染めた色を筆かななどで洗ひ去つて其上へまた繪具をかけるのは悪い方法でもないが、それがあまり各處に應用されては何からうさく感じられる。たゞ金の色などは其方法によつて旨く表はされて居る。

散文的と云ふよりも平々凡々な風景畫の多いなかでロワ氏の着眼に稍見る可きものがある。「石坑と風車」「小湖」の如きは殊に予の氣に入つた。前者は赤つばい石坑を前にして善く晴れた暮空に遠い風車を見せたものであるが、悪く騒がぬ用筆が圖題の寂寥に善く應じて居る。

蘇國の人でゞもあらうかと思ふハンケー氏の田園的人物畫は皆善く描けて居る。色、形、すべて穩健な描法で『マリー』と題する農婦の半身の風景を背負はしたのは殊に勝れて居る。シモン嬢の室内の諸作も先づは佳作の方に屬するやうである。斜陽の如き、其時間の應じは充分とも曰へまいが、卓の近くに居る女は仲々旨く出來て居る。『工女の室』も悪い方ではない。此人の描法はボタ／＼でもなく、と云つて幾度も幾度も重ね過ぎるのでもなく、またグアツシユ風に乾かずに、充分水畫の潤澤を保つた中庸を得たものである。

ホツドキンス嬢の夏の濱邊のスケツチとなるとまた大分違つて來る。それは亂暴と云ふ譏りを受けさうな處もある。少しく

リユシアンシモンの達者な水畫を聯想せしめる處もある。何でも濡れて居る間に手早く仕事をすることに相違ないが、日の當つた濱邊に赤い日傘を立て、其下に女小供の居ると云ふやうな圖、(皆同じ様な圖だが)の仲々敏活に旨く描けて居るのがある。

此頃木炭で輪廓乃至僅かの陰^{かげ}までを描いて置いて其上に着色する人を大分見かけるが、それは畫幅の大きな場合などには甚だ恰當な方法だと思ふ。たゞこれをするには其人が素描に長じて居なければならぬと云ふことを注意したい。繪具の間に散見する木炭の線が素描家的に的確でない程見すばらしいものはないのである。現に此展覽會にも其方法を用ひた作例が幾點かあるが其なかで見ると可きはシヤパイと云ふ人のもの丈である。氏はセイヌ河畔の揚場^{あげば}の雲天などを此方法によつて善く表はして居る。氏の油畫を二三枚サロン ドートンヌで見たが、皆灰色調の澁ひ畫であつた。さうして其サロンでは最眞面目なもの、方に屬して居た。今此處にある色紙に畫いた『冬の夕』の如きも暗い河水と白で畫かれた堤上の雪との關係が面白く出來て居る。

其外ラブルーシ氏のヂブリユーヂを畫いたと思はれる數枚のグアツシユと、ポルトン氏のヴェニス^{ヴェニス}のテンペラとが稍勝れて居る。ラブルーシ氏は好んで四角な粗い色紙に極めて水氣の潤れたグアツシユをかすらせてルシダネルの得意とするやうな建築物を畫いて居る。が予は寧ろホルトン氏の伸びた筆を愛する。



ヂュネニール氏はヴェニスサン マルクの堂内を五枚ばかり出して居る。俗畫と云ふてもあるまいが、たゞ根氣よく堂内の暗い處を寫生したまて、深い感じは出て居ない。光りを出す時、白を用ふることをせず、一旦染めた色を筆かなどで洗ひ去つて其上へまた繪具をかけるのは悪い方法でもないが、それがあまり各處に應用されては何かうるさく感じられる。たゞ金の色などは其方法によつて旨く表はされて居る。

散文的と云ふよりも平々凡々な風景畫の多いなかでロワ氏の着眼に稍見る可きものがある。「石坑と風車」「小湖」の如きは殊に予の氣に入つた。前者は赤つぽい石坑を前にして善く晴れた暮空に遠い風車を見せたものであるが、悪く騒がぬ用筆が圖題の寂寥に善く應じて居る。

蘇國の人で、もあらうかと思ふハンケー氏の田園的人物畫は皆善く描けて居る。色、形、すべて穩健な描法で『マリ』と題する農婦の半身の風景を背負はしたのは殊に勝れて居る。シモン嬢の室内の諸作も先づは佳作の方に屬するやうである。斜陽の如き、其時間の應じは充分とも曰へまいが、卓の近くに居る女は仲々旨く出來て居る。『工女の室』も悪い方ではない。此人の描法はボタ／＼でもなく、と云つて幾度も幾度も重ね過ぎるのでもなく、またグアツシユ風に乾かずに、充分水畫の潤澤を保つた中庸を得たものである。

ホツドキンス嬢の夏の濱邊のスケツチとなるとまた大分違つて來る。それは亂暴と云ふ譏りを受けさうな處もある。少しく

リユシアンシモンの達者な水畫を聯想せしめる處もある。何ても濡れて居る間に手早く仕事を終るに相違ないが、目の當つた濱邊に赤い日傘を立て、其下に女子供の居ると云ふやうな圖、(皆同じ様な圖だが)の仲々敏活に旨く描けて居るのがある。

此頃木炭で輪廓乃至僅かの陰までを描いて置いて其上に着色する人を大分見かけるが、それは畫幅の大きな場合などには甚だ恰當な方法だと思ふ。たゞこれをするには其人が素描に長じて居なければならぬと云ふことを注意したい。繪具の間に散見する木炭の線が素描家的に的確でない程見すばらしいものはないのである。現に此展覽會にも其方法を用ひた作例が幾點かあるが其なかで見るときはシヤブイと云ふ人のもの丈である。氏はセイヌ河畔の揚場(おほば)の雲天などを此方法によつて善く表はして居る。氏の油畫を二三枚サロン ドートンヌで見たが、皆灰色調の澁ひ畫であつた。さうして其サロンでは最眞面目なもの、方に屬して居た。今此處にある色紙に書いた『冬の夕』の如きも暗い河水と白で畫かれた堤上の雪との關係が面白く出來て居る。

其外ラブルシ氏のヂブリユーヂを畫いたと思はれる數枚のグアツシユと、ボルトン氏のヴェニスのテンペラとが稍勝れて居る。ラブルシシユ氏は好んで四角な粗い色紙に極めて水氣の潤れたグアツシユをかすらせてルシダネルの得意とするやうな建築物を畫いて居る。が予は寧ろホルトン氏の伸びた筆を愛する。



アラスカ
1911年

總數四百五十點のうちから予の選び出したのは僅にこれ丈である。自分から曰ふのも變なものだが、予は今假りに自分の水彩畫を此間に置いても格別の遜色はあるまいと信ずる。思想感情等の點から見れば殊に彼等の作物の多くを凌駕し得るか、やうに考へる。否日本人の水彩畫其物が全體に於て決して歐米人のそれに劣つて居ないと認めるのである。總括的に曰へば日本人の水彩畫が概して汚くよごれて發色が悪いのに比べて、西人は色が奇麗に保たれて垢抜けて居ると云ふやうな違ひはあらう。併しながら彼等の手際がよく色の奇麗な場合には多く自然の忠實な觀察と描寫とを犠牲にして習套に甘んじて居るのであるから(無調除外はあるが)秤はかりにかければ同じやうなことになる。其思想感情の方から觀察すると却つて西洋人の方に頭腦おたまの古い後れた人が多いのである。これは恰度現今の日本文學と西洋文學との一般の比較に就いても同じことであるらしい。早く天狗になりすまして困るが、此點に就いて日本の新人は相當の誇りを有つて居て然る可きである。

『サロンなどでは水彩、パステルの類は廊下に懸けられる』と云ふことを唯一の證據として、水彩畫なるものを油畫から幾段下つたもの、やうに斷じてしまふ者が之れまで日本の或洋畫家のうちにあつたが、それは極めて愚蒙なことである。大體佛蘭西の春のサロンの陳列の如きは決して理想的のものではない。其廊下に懸かるのだからどうで下らないものだと云ふことは謂れないことである。また假りに西洋に於て水彩畫が油畫程に重

きをなさぬとしても、それを直ちに日本へ當てはめなければならぬと云ふ理由はない。祖先から親みの深い水繪具に長じて、將來日本人の水彩畫が西洋に於けるよりも、より多く重きをなすことがあるとしても、それは少しも差支へのないことである。

(十月十六日巴里の寓にて)

パレット評判記 (一) エス、キタヤマ

他人のパレットを紹介すると云ふことは随分興味の深いことだ、多少研究の一端にもならうかと思ふ、毎號の餘白を利用して専門家、秀才の嫌ひなく、可及的細かく紹介することとせう。

赤城泰舒氏のパレット 四十一年の秋神田の

竹見屋から十五錢で求めたさうで、可成新らしくない二ツ折パレットだ、外部の所々に損傷があつて鐵葉が光つて見える、六寸五分に三寸、十八仕切を十二仕切に直した嫌にガタ／＼する品物だ一寸拜借して手に持つて、一番右の端からホワイト、レモンエロー、カドミウムエロー、バーミリオン、ローマスダー、コバルト、オルトラマリン、ビリヂアン、と云ふ配列で、此外に寫生の都合でベネチアンレット、コバルトバイオレット、等も使うさうだ、繪具は主にニュートンでホワイトやレモンエローは佛國の安物でも使はれないことはないとのことだ。筆は大抵の場合には夏毛の極大羽根軸一本でヤツつける。パレットの内部の塗料が剥れた時は奇麗に剝してしまつてエナメルを三四度も乾かして塗れば元の通りになるさうだ。次は誰?